論文の内容の要旨

論文題目

伊波普猷の「日琉同祖論」――「政治神学」から「政治」へ

氏名

崎濱　紗奈

本論文は、近代沖縄を代表する思想家・伊波普猷（1876−1947）のテクスト分析を通して、伊波の生涯の主張である「日琉同祖論」に対する新たな読解を提示することを目的とする。また、この読解を通じて、沖縄近現代思想史において常に主題とされてきた「主体」の問題を再考することを目指す。

沖縄近現代思想史における「主体」の問題は、「日本」に対する「同化」と、「日本」からの「異化」という文脈において語られてきた。従来の伊波普猷研究もこうした文脈に規定されてきた。とりわけ「日琉同祖論」は、明治期以降帝国主導でなされた「同化」政策を正当化する言説として機能したとして厳しく批判されてきた一方で、「沖縄」という「主体」を「日本」から「異化」し、帝国への抵抗を可能とするための戦略的言説であったとして擁護されてきた。

しかし、上記のような従来の伊波普猷読解は、「日本」そして「沖縄」という「主体」を前提とした上で伊波を論じてきたがゆえに、この二つの「主体」間の関係性に捕縛されるという限界を持つ。そこで本論文では、次のような読解を試みる。伊波の「日琉同祖論」、とりわけ「蘇鉄地獄」と呼ばれる 1920 年代に沖縄を襲った未曾有の経済危機以降、民俗学的・言語学的探究の中で伊波が展開した後期「日琉同祖論」（本論文ではこれを「原日本」＝「原沖縄」としての「日琉同祖論」と呼ぶ）にこそ、この限界を克服し、日本／沖縄という二者関係を脱構築する可能性が内包されている。しかし本論文は、このような可能性と同時に、伊波の「日琉同祖論」が構造的・原理的に抱える限界を明らかにすることを目的とする。その限界とは、「政治」なき「国家」を理想化するロマン主義的

態度である。本論文ではこれを、伊波普猷における「政治神学」と呼ぶ。以下、各章の要旨を述べる。

序章では、沖縄近現代思想史における「主体」の問題の系譜を整理する。上述したように、「沖縄」という「主体」は「日本」との関係性において構築されてきた。伊波普猷は、こうした「主体」の問題に正面から格闘した思想家として位置付けられ、読解され続けてきた。しかし、このような「主体」の論じ方は日本／沖縄という二者関係に捕縛されるという限界を持つ。また、「沖縄」という「主体」そのものが持つ排他性・暴力性についても批判がなされてきた。だが、「日本」という国家のもと抑圧経験を被ってきた「沖縄」は、その「主体」を「日本」との関係性抜きで構想することは不可能であり、たとえ「主体」が暴力を孕むものであったとしても、現状を変革するための結集点としての「主体」を放棄することも不可能である。ここから、沖縄近現代思想史における最大の問いが導出される。「主体」を批判しつつ、同時に「主体」を諦めないことは、いかにして可能か。序章では、「政治」的抵抗を放棄しないための「主体」を構想するために積み重ねられてきた先行研究を批判的に検討する。

第 1 章では、本論文が主要な分析対象とする後期「日琉同祖論」、すなわち「原日本」＝「原沖縄」としての「日琉同祖論」との対比として、初期「日琉同祖論」を検討する。具体的には、1910 年代のテクストを分析する。ここで、「原日本」＝「原沖縄」としての「日琉同祖論」との相違を明らかにするために、伊波の初期「日琉同祖論」を、ジャック・ランシエールの定義に従い「政治哲学」と呼ぶ。ここで見るように、伊波の「政治哲学」的態度は、「沖縄」という「個性」を帝国内部に配置しようと試みるものである。その意味で、初期「日琉同祖論」は、従来の伊波普猷読解の枠内に収まるものであることを明らかにする。

次に、伊波がいかにして初期「日琉同祖論」から脱却を図るのかを明らかにする。第 2 章では、そのための準備作業として、伊波に発想の転換をうながす契機となった「蘇鉄地獄」と、この経済危機下において沖縄が置かれた状況を、向井清史＝冨山一郎によって提唱された「辺境」という概念を手がかりに分析する。ここでは、「沖縄人」という「主体」が、資本主義というシステムの只中において再人種化されるプロセスを確認する。その上で、「原日本」＝「原沖縄」としての「日琉同祖論」とは、こうした再人種化のプロセスに抗うために構想されたものであることを明らかにする。

第 3 章では、柳田國男の深い影響のもと、伊波が、資本主義の引き起こした問題を「郷土研究」という方法によって分析し、解決策を模索するという戦略を展開していく様子を分析する。伊波は、天皇に象徴される神的＝政治的権力を搾取の根源とみなし、資本主義とは、こうした権力関係の延長線上に発展し生起したシステムであると考えるように至る。このように、資本主義を発生させ、また、それを維持する力を伊波は「政治」と呼び、これを「悪」と見做した。反対に伊波は、『おもろさうし』をはじめとする古代歌謡の読解を通して、搾取の根源となり得ないような「善」なる神と、その神のもとに実現さ

れる絶対的平等の担保された共同体「まきよ」を構想した。第 3 章では、こうした善／悪の両面を併せ持つ象徴的な存在として伊波のテクストの中に登場する「稲」について検討を行う。

続く第 4 章では、伊波が、「海部」＝「アマミキヨ」という集団を基軸に据え、自らの「日琉同祖論」を練り直していく過程を明らかにする。本論文ではこれを「原日本」＝「原沖縄」としての「日琉同祖論」と呼ぶ。伊波は、「海部」＝「アマミキヨ」＝「善」、「天孫」＝「悪」と位置づけ、前者の「善」なる共同体は、後者が「政治」という「悪」を持ち込んだがために崩壊したと考えた。「天孫」に追われた「海部」は南へと敗走し、「アマミキヨ」すなわち「琉球民族」の祖先となった。これにより「善」なる共同体「原日本」は沖縄へと移植され、ここに沖縄の原点＝「原沖縄」が形成された。このように考えることによって伊波は、「天孫」の記紀神話によって隠蔽・抹消されてしまった「海部」＝「アマミキヨ」の神話を起点として、「日本」そのもののあり方を根底から変革しようと試みたのだ。

しかし、「原日本」＝「原沖縄」としての「日琉同祖論」には次のようなアポリアが付き纏う。それは、共同体を規定する神の問題である。第 5 章では、伊波がこのアポリアを解消する手つきを明らかにする。上述したように伊波のテクストにおいて「稲」は善／悪両面を併せ持っている。伊波は「稲」は遠来神によってもたらされたと定義した。そこで生じるのが、次の問題である。いかなる神が「善い稲」を齎したのか。「善い稲」は誰によって「悪い稲」に歪められてしまったのか。ここでは、「稲」が持つ両義性を排除し、「善」なる側面のみを現前化させる伊波の手つきを、彼の神観念に着目しながら検討する。伊波は、柳田國男、そして折口信夫から深い影響を受け、自らの神観念を構想した。それは、祖先神と遠来神という、真っ向から対立する二種類の神観念を調停させる試みでもあった。端的に言えば、伊波は、祖先神を調和をもたらす神、遠来神を「政治」をもたらす神であると考えた。「政治」なき共同体を構想する伊波にとっては、祖先神の方が好都合であるように見える。しかし、伊波の「日本文化の南漸」という主張を論証するためには、遠来神という存在が不可欠であった。そこで伊波は両者を融合し、「来訪する祖先神」という新たな神観念を構想するに至った。伊波はこれを「真（だに）の神」と呼び、神が棲まう地を「あまみや」＝「ニライ・カナイ」と位置付けた。「真の神」のもとに「政治」なき「善」なる共同体「まきよ」を構想する伊波の試みを、本論文では伊波の「政治神学」と呼ぶ。第 5 章では、こうした「政治神学」的態度から、戦時中の伊波の態度を解釈することを試みる。これまで、戦時中の伊波を巡って、戦争に積極的に協力したとして痛烈に批判する言説と、情況に対する批判精神を忘れなかったと擁護する言説とが対立してきた。これに対し本論文では、伊波は戦争を「真の神」が到来する機会として捉えていたことを主張する。換言すれば伊波は、眼前の戦争そのものについて論じているのではなく、「真の神」の招来を可能にする屹立した時間・空間として「戦争」をロマン化

した。本論文は、こうしたロマン主義的態度を、伊波の「政治神学」が抱える原理的問題として位置付ける。

しかし、「政治」なき「国家」を究極の目的とする伊波の「政治神学」は、伊波自身のテクストの只中において常に・既に脱構築されている。すなわち、「政治」は伊波のテクストにおいて抹消不可能なものとして残り続けているのだ。脱構築の端緒となるのは「稲」である。伊波は「稲」が持つ両義性を問題視し、「善」なる側面のみを現前化させるために、自らの「政治神学」を構想した。しかし、「稲」、そして「稲」を授ける神は、はじめから善／悪に二分されているわけではない。つまり、「稲」そして「遠来神」からどのような可能性が現勢化するのかについては、未知数である。したがって、「政治」を抹消しようとする伊波の試みは、伊波のテクスト内部において常に・既に脱構築されている。終章では、伊波のテクストにおける抹消不可能なものとしての「政治」を、ジャック・ランシエールが言うところの「政治〔la politique〕」に連なるものとして理解する。また、「政治」−「政治〔la politique〕」を表出させようとする力を＜主体＞と呼び、従来の「主体」とは異なる動詞的なあり方としてその可能性を模索する。